

## 文学におけるしぐさと表情の研究

P a t r i c i a   v a n   V u g t

人間はお互いの言うことに反応して行動するだけではなく、意識的であるにしろ無意識的であるにしろお互いのしぐさや表情の意味を読み取り、そして、それに対しての反応によっても行動する。時には、しぐさや表情は言葉よりも重要な意味を持つことさえあると言えるだろう。

文学の作品の中に登場する人物のしぐさや表情が同じような役割を果たしているのは当然なことである。登場人物もお互いのしぐさや表情に反応して行動する。登場人物が出している自覚と無自覚な合図であるが、それ以上一層深い意味を持つことも明らかである。なぜかという、登場人物のしぐさや表情は作家の自覚的な意図に基づいて書かれたものだからである。したがって、一般的なしぐさや表情より純化されているものである。もちろん作家の個人的な意向によって決められるものではあるが、それを越える時代的・社会的な約束にも影響されているのではないか。

私が考えるには、文学の作品の中の登場人物のしぐさや表情には作家の自覚的要素と無自覚的要素、作家の個人的な意向、そして社会的約束が混合されていると思われる。ゆえに、文学におけるしぐさや表情の研究は他の文学思想や研究の方法に加えることによって文学の作品がより面白くなり、より深く理解されることにつながるとおもう。

題材としては、私が個人的に好きである谷崎潤一郎の『痴人の愛』という作品を取り上げた。この作品は、関東大震災によって谷崎潤一郎が関西に移った次の年、大正十三年（一九二四）の三月から、さらにその翌十四年の七月にかけて発表された作品である。前半は「大阪朝日新聞」、その後大正十三年六月から十月までの中止を経て、後半が雑誌「女性」に連載された。その反響はきわめて大きかった。当時は一時的に、女主人公の名前をとってナオミズムという言葉を流行させたほど、この作品の成功は作者谷崎をそれまでの長期間のスランプから脱出させることになった。

＜私はこれから、あまり世間に類例がないだろうと思われる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざっくばらんに、有りのままの事実を書いて見ようと思います。＞これが『痴人の愛』の書出しである。主な役を果たしている登場人物はナオミと河合譲治（私）である。ストーリーは彼らの出会いから結婚生活を含めて八年間、河合譲治の目を通して語られる、二人の愛の話である。

しぐさや表情を取り上げるまえに二人の出会いの場面を、もう少し詳しく見てみたい。出会いの時ナオミは浅草の雷門の近くにあるカフェー・ダイヤモンドという店で給仕女として働いている。彼女は十五歳だった。河合譲治は二十八歳の男性で、ある電気会社の技師をしていた。最初彼女の西洋人らしい名前が彼の興味を引く。＜「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くとまるで西洋人のようだ＞、そして彼女の顔も西洋人臭く、惻巧そうに見える。という場面からストーリーを簡単にいうと、彼らは知り合って二ヶ月目で河合がナオミに彼のプラン（ナオミを引き取って、そして教育してやって、立派な女にする）の話をする。彼女は簡単に＜ええ、いいわ、そうしてくれれば＞と答えて、彼らは友達として一緒に住むようになる。それから一年ぐらいして、彼らが深い関係になるが、それにしても友達のような雰囲気の中で一緒に生活している。結婚してからも、河合は彼女のことを奥さん扱いしないで「ナオミちゃん」と呼び、ナオミは河合のことを「譲治さん」と呼んで、河合はますますナオミを愛するようになる。初めて鎌倉での彼女の裏切りに気づいたときは彼女を許すが、二度目ナオミに裏切られて、彼女を家から追い出す。が、すぐにそれを後悔し、ナオミの友達の浜田という人を通して何とかして彼女との連絡を取ろうとするが、次の日浜田の話を聞いてナオミのことをあきらめようと決心する。けれども、ナオミがたびたび家に荷物を取りに来るようになると、再び彼女の魅力に夢中になり、結局最後には彼女の条件でまた一緒に生活するようになる。

実際にナオミと河合譲治の『痴人の愛』の中のしぐさや表情を見てみると、河合譲治のしぐさよりナオミのしぐさの方が明らかに多いことに気が付いた。ストーリーは河合譲治の目を通して語られる話だからであろう。それに応じて私は次のようなアプローチをすることに決めた。つまり、ナオミのしぐさと表情を中心に調べ、それらに対しての河合譲治のしぐさや表情、又は行動を見てみたい。

河合譲治とナオミの出会いの場面ではナオミは十五歳の少女で、＜隅の方に小さくなって黙ってチョコチョコ働いてい＞る（一）、＜両足をぶらんぶらんさせながら、片手を私の肩にあてがって、息を凝らして絵の方を視つめる＞（一）、＜堇、たんぽぽ、げんげ、桜草、――そんな物でも畑の畔や田舎道などに生えていると、忽ちチョコチョコと駆けて行って摘もうとする。そして終日歩いているうちに彼女の手には花が一杯になり、幾つとも知れない花束が出来、それを大事に帰り途まで持って来＞る（二）のような可愛い少女らしいしぐさを振る舞う。ナオミは静かな少女で、＜素直に何処へでもついていく＞（一）、そして＜手を叩いて愉快がったり、飛び上がって喜んだりするようなことはない＞（一）＜黙って、伶俐そうな眼をパッチリ開いて見物している顔つき＞（一）を見せる。ナオミはしぐさから見たら割と普通の少女のようである。表情の方は＜別にうれしそうな表情もしない＞（二）、＜ちょっと不愉快な顔つきをす＞る（二）、＜眼の中には、明らかに悲しいよう遣る瀬ないような色が浮かんでいる＞（二）などをみせて、あまり明るくはない。河合譲治と一緒に大森で見つけた家に住むようになってからも、子供らしいしぐさがしばらくの間続く。＜きゅきゅと笑いながら、あまり元気に梯子段を上がったたり下りたりし過ぎたので、とうとう足を踏み外して頂辺から転げ落ち、急にしくしく泣き出＞す（三）。そしてナオミの＜涙を一杯ためて、ぼたぼたはなを滴らしながらしゃくり上げる顔つきが、まるで願はない子供のよう＞（三）である。ナオミは子供のように遊んだり泣いたりすることに対しての河合譲治の反応を見ると、彼はまるでナオミのお父さんになったような役を取っているに違いない。その夏、彼らは鎌倉で二、三日を過ごした時から、ナオミが＜銭湯へ行くのを大義がったものですから、海の潮水を洗い落とすのに台所で水を浴びたり、行水を使ったり＞する（四）ので、彼が＜彼女をお湯へ入れて、手だの足だの背中だのをゴムのスポンジで洗ってやる習慣がつ＞く（四）ことにさえる。しかし、ナオミのしぐさや表情、そして笑い方が少しずつ変わり始める。＜「ふん」と、彼女はその獅子ッ鼻の先を、ちょいとしゃくって意を得たように笑＞ったり（三）、＜鼻の先で生意気そうにせせら笑＞ったり（七）、＜にやにやした、奇妙な笑いを浮か＞べたりする（七）。というように、人を見下したような鼻先の笑い方は彼女の癖になる。笑い方の点から見ても、以後河合譲治に対して彼女は＜じーっと鋭く私の眉間を睨めつけ＞る（六）、＜物凄じい瞳を据えて私の顔を穴のあくほど睨める＞（六）という目のしぐさを使うことによって、ナオミは、河合譲治と知り合ったころに比べると、かなり強くなったという印象を受ける。

又、河合譲治は毎日ナオミに英語を勉強させ、彼女が彼の期待に応えられない時は怒って彼女を厳しく叱る。すると、＜ナオミはむっと面を膨らせて、しまいにはしくしく泣き出すことがよくある（六）が、一回＜彼女はいきなり帳面を驚掴みにして、ぴりぴりに引き裂いて、ぼんと床の上へ投げ出す（六）ことが原因になって、河合譲治に＜「よし！ 詫まらなけりやそれでいいから、いま直ぐ此処を出ていってくれ！」＞（六）と言われ、＜仕方がなしにナオミは机へ両手を衝いて、――それでもまだ何処か人を馬鹿にしたような風つきをしながら、不精ッたらしく、横ッちょを向いてお辞儀をす＞る（六）しぐさによっても、同じ印象を浮ける。

と同時にナオミはだんだん自分の体を意識し始め、それを使って河合譲治を誘うしぐさが多くなる。そして、英語の勉強の場面では＜彼女は例のビロードの服だのガウンだのを着て、脚の突先でスリッパをおもちゃにしながら椅子にもたれる始末ですから、いくら口でやかましく云っても、結局「遊び」と「勉強」とはごっちゃ担ってしまう＞（六）と、河合譲治がその誘いに弱いと分かって、何か欲しい時、又は彼に何かして欲しい時にそういうしぐさを使うようになる。例えば、ナオミは着物を買うのに、三十円が欲しいので＜「トランプで取ってやろうかな」＞（七）と云って、お金を賭けてトランプをする。そして、＜勝負の時は大概ゆるやかなガウンのようなものを、わざとぐずぐずにだらしなく纏っていました。そして形勢が悪くなると淫りがわしく居ずまいを崩して、襟をはだけたり、足を突き出したり、それでも駄目だと私の膝へもたれかかって頬ッぺたを撫でたり、口の端を摘まんでぶるぶると振ったり、ありとあらゆる誘惑を試み＞る（七）。それに対する河合譲治の反応を見ると＜頭の中が何だかもやもやと曇って来て、急に眼の前が暗くなって、勝負のことなぞ何賀何やら分からなくなってしまう＞（七）ことになるのである。そのように河合譲治は女としてのナオミの魅力の取りこになり、除々に彼女に翻弄され始める。

ナオミと河合譲治が結婚してからも、ナオミは奥さんらしいしぐさを一切見せないで＜脱いだものは脱ぎッ放し、食べたものは食ベッ放しと云う有様で、食い荒した皿小鉢だの、飲みかけの茶碗や湯呑みだの、垢じみた肌着や湯文字だのが、いつ行って見てもそこに放り出してある＞（九）。好きなことをして遊んで、河合譲治の給料がほとんどなくなるほどお金を使って新しい服を買ったり、あちこちのお店に平気で高い料理を頼んだりする。すると、自分のお金の使い過ぎによって、二人がせっかく習ったダンスに行くのに、彼女が必要とする新しい着物を買うのが断られたら、＜「じゃあ何のためにダンスを

習ったのよ。――いいわ、そんなら、もう明日から何処にも行かないから」そう云って彼女は、その大きな眼に露を湛えて、恨めしそうに私を睨んで、つんと黙ってしまう> (九)。結局、彼の田舎にいるお母さんにお金を送って貰うことで、新しい着物を買ってもいいということになってから、ナオミは気にしているような口ぶりで<「でもおかあさんに悪くはない?> (九)と聞くが、最初から彼女はそのつもりでいたことが彼にもうすうす読める。そして、踊りに行く日になって、河合譲治が仕事から帰ってくると、ナオミは<珍しくも私の服を出して来てくれ、埃を払ったり火熨斗をかけたりしてくれ>る (十)。というようにナオミの女性っぽいずるさがはっきり出て来るが、河合譲治はそれを知りながらも、どうすることも出来なく、彼女の思い通りになってしまう。

そのような彼女のずるさや人間性が踊りの場面ではさらに現わになる。ここで登場する三人の女性は、ダンスの先生のシュレムスカヤ夫人、春野綺羅子と井上菊子は、皆ナオミとの比べ者の脇役である。シュレムスカヤ夫人の皮膚のいろの異常な白さと、体の一種の甘い匂が、河合譲治に<夫人の前に出ると全くナオミの存在を忘れ>させる (九)。春野綺羅子と井上菊子の方は、初めてダンスホールに行く場面に登場する。綺羅子は帝劇の女優で、物の言いよう、眼の使いよう、頸のひねりよう、手の挙げよう、総てがナオミよりずっと洗練されている。河合譲治がナオミと一緒に踊るのは大失敗になるが、綺羅子と踊って見ると、<私の心は俄かに浮き浮きと勇み立ち、私の足は自然と活潑なステップを踏み、あたかもメリー・ゴー・ラウンドへ乗っているように、何処までもするすると、滑かに廻って行>く (十一)。シュレムスカヤ夫人の前で<ナオミは真っ赤な顔をして何も云わずにコソコソと握手を>する (八) し、<綺羅子が席へ交ってから、ナオミはさっきの傲慢にも似ず、冷やかすどころか俄にしんと黙ってしま>う (十)。つまりこの自分より上品な二人の女性の前ではナオミは大人しくなってしまう。菊子の方は自分に似合わない西洋人ばい格好をしているから、表面的にはナオミの方が勝っている。しかし、ナオミの菊子に対しての態度を見てみると、皆の前で菊子を猿に例え、彼女の前で<「あたしの家に猿が二匹飼ってあるのよ、だからまアちゃんが好きだったら、一匹分けて上げようと思うの。どう? まアちゃんは猿が好きじゃない?> (十) と、猿を話題にするように自分より劣っている者に対しては、非常に冷酷である。それに対して、菊子は案外人の好い女だと思えて、自分が嘲弄されているとは気がつかない。その二人の対比があまりにも鮮明であるので、ナオミの人格的な欠陥が現わになる。河合譲治もそれを気になって、踊りの帰り道の電車の中で、<わざと反対の側に腰かけて、自分の前に居るナオミと云うもの

を、もう一度つくづく眺める> (十一)。ここでは一時的、冷静に彼女のことを見ようとするが、又いつもの生活に戻れば彼女の魅力の取りこになってしまう。

又、彼女の男性関係から言っても、次のようなことが言える。踊りに行く時によく会う、あとでナオミの裏切りの相手だと分かる、彼女の若い男性の友達が大森の家にも遊びに来るようになる。六月のある雨の降る夜に彼らは家に泊まり込むが、その場面でのナオミの振る舞いは、<足の爪先で男の頭をグイグイ押>したり (十に)、<立て膝をして両脛をハの字に踏ん張っているナオミの足の、一方は浜田の鼻先に、一方は私の鼻先にあるのです。そして熊谷はと云うと、そのハの字の間へ首を突っ込んでい>る (十二) という風に全然彼女を洗練されているような女性に見せないにもかかわらず、河合譲治が<「ナオミちゃん・・・」と、私はみんなの静かな寝息をうかがいながら、口のうちにそう云って、私の布団の下にある彼女の足を撫でてみ>る (十二)、そして<覚えず、その足の甲へそうッと自分の唇をつけずにはいられ>ない (十に) ようにナオミの態度を全く許している。しかし、会社の送別会でナオミの男性関係に関してのよくない評判を聞かされてから、初めて彼女に疑惑を抱く。彼女に会社でのことを話すと、ナオミは<「十五の歳から育てて貰った恩を忘れたことはない」とか「譲治さんを親とも思い夫とも思っています」とか、極まり文句をいいながら、さめざめと涙を流したり、又その涙を私に拭かせたり、矢継ぎ早に接吻の雨を降らせたりす>る (十四) ように彼を安心させる。そして、その時から河合譲治が会社から帰って来るとナオミはいつも<独りで大人しく留守番して、小説を読むとか、編物をするとか、静かに蓄音機を聴いているとか、花壇に花を植えているとかして> (十四)、態度を変える。

しかし、そのなつ又鎌倉で休みを過ごして、裏切りが河合譲治に見つけられても、ナオミは<下を向いて、黙って、唇を噛みながら、上眼づかいに穴の開くほど私の顔を睨>む (十六) とか、<私の顔をチラと偷んで、すぐ側方を向>く (十七) とか、<いやにつめたい顔つきをして寝た振りをす>る (十八) などから始まって、<「譲治さん、私がいくら冷淡だって、あなたは怒る権利はないわよ。あなたはあたしからとれるものだけ取っているんじゃないですか。それでもあなたは満足しているじゃないですか」――と云う眼つきで> (十八) 河合譲治をみて、<「ふん、何と云うイヤな奴だろう。まるで此奴は犬みたようにさもしい男だ。仕方がないから我慢してやっているんだけど」> (十八) と云う表情を見せる。つまり、彼女は一時的にしおらしい態度を見せるが、本質的には変わっていない。その後、彼女の男性遊びが終わっていないことを彼が知り、彼女を家から

追い出してからも、河合譲治は＜未だにじーッと瞳を据えて私の方を睨んでいるように感じられ＞（二十）、それだけでなく、＜床に四つ這いになって、今も彼女の体が背中へぐっとのしかかってでもいるかのように、部屋をグルグル廻ってみ＞る（二十）ことさえするほど、彼女に未練があることが分かる。

又、ナオミが家を出てからも、時々荷物を取りに来る度にするナオミのしぐさの全ては、河合譲治をまた自分に夢中させるために、彼を誘うような又は彼をからかうようなしぐさをわざとしている。たとえば、河合譲治の＜視線の届く場所へやってきて、後向きになって、着物を着替え＞たり（二十四）、＜足を鰭のようにくねくねさせ＞たり（二十四）、＜私がいるとわざと着物を着換えたり、着換える拍子にずるりと襦袢を滑り落して、「あら」と言いながら、両手で裸体の肩を隠して隣りの部屋へ逃げ込＞んだりする（二十六）か、最初に彼の興味を引いた自分の西洋人らしいところをわざと出す。河合譲治は最初は冷淡な態度を取って＜ぐるりと彼女に背中を向けて黙って＞（二十四）みるが、やはり＜ちょいちょい眼を向けないではいられ＞（二十四）ない。そして、日にちが立つと彼はますますいらいらして、最後は＜彼女の足下に身を投げ＞出し（二十七）、＜「じゃあ己を馬鹿にしてくれ、いつかのうちに己の背中へ乗っかってくれ、どうしても否ならそれだけでもいい！＞（二十七）。というように、完全に彼女の態度に負け、結局は彼女の出す自分勝手な条件で再び彼女と生活するようになる。

以上、ナオミのしぐさや表情を中心にして『痴人の愛』を調べてきた。最初はしぐさと表情の研究が私の狙いだったが、しぐさに関して言えば、その範囲を越えたところもあると思われる。が、少なくとも行動という大きな範囲の中で自分が必要だと思うものを取り入れた。

全体を見渡すとナオミは、『痴人の愛』が書かれた時代から見て、西洋の踊りを楽しんだり平気な顔で男性の友達を作ったりする、時代的にはとても新しい強い女性として描写されている。古風なしぐさは全然なく、日本女性の独特なしぐさも非常に少ない。逆に女性らしくない＜男のように股を開＞く（十に）というようなしぐさがあり、それによって、彼女のそれまでの女性と違うところが強調されていることが考えられる。一番多く出るしぐさはナオミの目のしぐさである。特に、彼女が怒っている時に、言葉を使うより目のしぐさを使って、河合譲治を鋭く、彼の顔を穴の開くほど、見る。その他たびたび出るのは、ナオミの癖であるところの、鼻先の笑い方であり、彼女が河合譲治との関係の中で

自分の立場が強いと意識していることを指しているだろう。

河合讓治の方のしぐさや表情は、ナオミに比べて少ない。それはこの作品が彼女のしぐさや表情に対しての彼の感じる思いで綴られているからである。それに加えて少しの行動は本文の中にあるが、それは全体のストーリーとしてナオミに服従していくまでの経緯でしかない。少ないものの中で一つの例をあげると、彼が四つ這いになってナオミを背中に乗せて部屋を歩く馬の遊びである。その場面が四回あって、一回目はただの遊びだが、二回目、三回目は二人で一緒に住むようになったころの雰囲気を取り戻すためであり、四回目は彼のナオミへの絶対的な降服を意味するものである。このように彼の行動は、前にも述べたようにストーリーに付随している。つまり、要約すれば河合讓治はナオミに対して指導的な強い立場から、従属的な弱い立場へと移行していくのである。以上が河合讓治とナオミという主人公二人のしぐさや表情から読み取れる人間像である。

それにしても、『痴人の愛』の中に出てくる、私が日本人独特のしぐさや表情として受け取ったものを見てみると、それらの数は非常に少ない。が、ちょこちょこ歩くとか素足を見せるというしぐさは私から言えば、日本人らしいものに思われる。しかし、その数が少ないのは、谷崎潤一郎がこの作品でその時代における「新しい女性像」を描こうとしたからではないだろうか。近代日本の時代的・社会的な影響は、この「新しい女性像」というものに現われているように私は思われる。

故に、今後の研究の課題として、この「新しい女性像」というものに重点をおき、しぐさや表情を通して、谷崎潤一郎の他の作品や、同時代の作家の作品を含めて、考察していきたいと思う。